

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
142
2019.12

公益財団法人PHD協会
2019年度会報142号

特 集

PHD 2019年度研修生レポート

師への恩返しと母への感謝を胸に

ミャンマー研修生 ゼンゼンさん、インタビュー



PHD LETTER Volume.142

Contents

P.2 2019年度ネパールスタディツアー

P.3-4 **PHD Movement** vol.25
PHD協会は研修生をどうやって選ぶのか？
～2020年度研修生選考の裏側～

P.5-12 2019年度研修生レポート

P.5-6 特集「お坊さんの夢は私が引き継ぐ」、
恩返しと母への感謝を胸に ゼンゼンさん、インタビュー
P.7 ゼンゼンさん 丹南健康福祉センターでの研修
P.8-10 ゼンゼン(ゼンモーエー)、プットリダリア スシラ・バセル・サレキ
P.11 2019年度研修生 4月～10月研修

P.12 日々是東奔西走

P.13 チャリティ"MOEMOE" Tシャツ

P.14 PHD活動紹介 2019年7月～10月

P.15 PHDNews

表紙写真/母校のオウ学校で英語の授業をするゼンゼンさん。

～ほんとうの交流とは生活交流～

温故知新 岩村語録 その17

PHD研修生は(中略)研修期間中は日本の家庭に滞在し、その家族と共に生活します。農家であれば、起床から就床までの生活時間はすべて一家の働き手とおなじようになります。これを私たちは生活交流とよんでいます。外国の人だけを宿舎やホテルで生活してもらったのでは、真の交流はあり得ないのです。

「出典：共に生きるために(1982年) P.20」

生活を共にする、PHD研修の根幹であると思う。今もホストファミリー、指導者の皆さんが実践している。今号の最終頁でも来季のホストファミリーを募集している。ご興味がある方はぜひお問合せください。(さ)



1983年神戸PTA大会にて登壇されるPHD運動提唱者の岩村昇先生。



PHD

PEACE, HEALTH&HUMAN DEVELOPMENT

公益財団法人PHD協会

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和(Peace)と健康(Health)を担う人づくり(Human Development)をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年に今井鎮雄(初代PHD協会理事長)と共にPHD協会を設立しました。

PHD LETTER 142号

発行：公益財団法人PHD協会
住所：〒650-0003 神戸市中央区
山本通4丁目2-12 山手タワーズ601
電話：078-414-7750
FAX：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人PHD協会
01110-6-29688

REPORT

2019年度ネパールスタディツアー

2019年7月4日に直行便も就航、今後ますます日本との交流も進んでいく国、ネパール。9月10日から9日間同国に滞在、ダリット*の女性に対する差別について学び、来年度の研修生選考を行いました。国内研修生 横原 杏菜 山本 仁美 = 文

*ダリット：ヒンドゥー・カースト制度における被差別階層の人々。不可触民とされる。

FEDOを訪れて

カトマンズ到着後、最初にFEDOを訪問しました。FEDOはFeminist Dalit Organizationの略であり、ダリットの女性地位向上のため、1994年に設立されました。ネパールでは今もなおカースト制度が色濃く残り、一番下の階層には不可触民とされるダリットの人たちがいます。その中でも特に女性はひどい差別を今も受けています。しかし、日々の活動の中で感じる変化を伺うと、識字率や健康状態、政治への参加が促進されてきていると実際に感じるとのこと。また、男性も積極的にカースト差別撤廃運動を行っているのだと言います。一つ一つの行動の積み重ねが、差別撤廃への方向に、着実に変化していると感じた瞬間でした。FEDOはさまざまな支援を通して、彼女たちの社会的な地位向上を目指し活動を続けています。

元研修生のSSSクリニックへ

PHDの初代研修生が開業したSSSクリニックでは今現在、2010年度の研修生ウルミラさんと2012年度の研修生ランマヤさんが助産師として働いています。ここではネパールでの出産と避妊方法についてお話を伺いました。女性だけが避妊することが主流となっており、現在の避妊方法では女性の体に大きな負担がかかるのだと言います。また、一年間で出産に訪れたおよそ150名のうち、出産後34名の方が子宮脱になりました。その原因として妊娠中に栄養を十分に摂取しなかったことと、出産後家計を支えるため、すぐに退院してしまうこ



ジドゥルボカリ村で活動するダリット女性のグループ「ハラバラ」のメンバー

とがあげられます。ランマヤさんは「良くないけれど、家庭の事情があるから強制はできません」と複雑な表情を浮かべていました。現在は、男性が避妊する場合も増えてきているとのことですが、その数は決して多くはなく、女性に負担を強いる社会の現状が垣間見えました。

長期戦の研修生選考会議

ネパールスタディツアーの醍醐味である来年度の研修生選考会議を行いました。今年は3カ所の村から総勢7名の候補者が集まり、選考会議は難航しました。私たち国内研修生も選考会議に参加させていただき、どれだけ多くの方が研修生選考に関わっているかを実感しました。さらに、研修生になるには大きな決断と覚悟がいるということ、村の為に頑張るという強い信念を持つことが重要であると感じました。今期研修生のスシラさんは、来日する前は思いを内に秘めつつも、それを表現することができませんでした。来日後は様々な研修を通じて、徐々に積極的に自分の思いを表現できるようになりました。来年の研修生も日本での研修を通じて成長して欲しいと思います。

サビナさんとの再会と帰国後の活躍

今回のネパールツアー初日から最終日まで共に行動してくれた去年の研修生サビナさん。彼女が主体となり、ハラバラグループによる歓迎会を企画してくれていました。帰国後も日本で学んだリーダーシップを実践し、日本のおもてなしとはまた違う、心の底からのもてなしに感動しました。村で



左から横原、2018年度研修生サビナさん、山本。

困ったことがあれば直ぐに会議を開き、率先して発言する彼女に影響を受けた女性も多いのではないのでしょうか。ハラバラグループの活発な活動は他の女性グループにもその評判が広がり、他グループの活動も活性化されつつあります。

サビナさんは、いつも「大丈夫ですか?」と心配し、深夜まで私たちの為に様々な事を考えて、朝5時半には起床し、準備をしてくれていました。私たちはその優しさに何度も救われました。首都カトマンズへ戻る日、サビナさんは村に残る予定でしたが、約3時間もかかる空港まで見送りに来てくれました。その道中、女性の人権について話す姿は真剣そのもので、強い意志を感じました。私たちもこの日本社会でできることは無限にあり、誰もがその可能性を持っていると思います。私たちは、影響力を発揮できる人材へと、このネパールでの学びを通して成長していきます。





ネパールからの2020年度研修生に選ばれたアシカさん。



上写真/2020年度ネパール研修生アシカさんの村の住民の多くはダリット（被差別カースト）である。写真はダリットの女性の地位向上を目指すグループのメンバー。研修生はこうした人々の期待を背負って日本にやってくる。右写真/アシカさん（中央）、研修担当山本（左）と事務局長坂西（右）。



PHD Movement vol.25

PHD協会は研修生をどうやって選ぶのか？ ～ 2020年度研修生選考の裏側～

今年も研修生の選考を3カ国で終えた。選考はそれぞれドラマに溢れている。研修生にとっては一生を左右するものであるし、送り出す村にとっても一大事だからだ。今年、最も難航したネパールでの選考を振り返りながら、PHD協会における選考のポイントを紹介したい。そこには当会の人材育成に対する考え方が凝縮されている。

難航したネパールの選考

近年は国、地域により選考のスタイルも多様になってきているが、ネパールは最もオーソドックスな選考だと言える。今回で言えば3つのダリット女性グループから事前選考で選ばれた計7名を選考した。選考の手順は1. 全体説明、2. 個別面接、3. 家庭訪問、4. 選考会議という流れだ。

今回は個別面接で一人抜きだされた方が

いた。本稿ではAさんとして。面接終了時点でAさんにほぼ決まりかと思っただが、周囲の評判を聞いてみると芳しくない。そこで悩むことになった。最終的にアシカさんという20代の女性となったが、そこに至る過程の中で3つの信頼があったことが再確認された。

「3つの信頼」

1. 現地及び過去の研修生への信頼
2. 候補者への信頼
3. 研修システムへの信頼

当会の選考において一番大事な基準は、能力でも意欲でもない。それは「研修終了後、村に戻り、長年にわたって村のために活動すること」である。仮にどれだけ能力が優れていても、村から出て行けば研修

事務局長 坂西卓郎 = 文
～分かち合い実践録～

は意味を成さないからである。

1. 現地及び過去の研修生への信頼

現地の声を聴く

「村に戻る」、つまり将来の行動が重要なポイントになる訳だが、未来のことは誰にもわからない。私たちの原則に「事実も過去にしかない」という考えがある。地域コミュニティで生きている研修生候補者の過去は多くの人に共有されている。できるだけ多くの信頼できる人たちから、彼や彼女の過去を聴きだすことにより、さらに詳細に事実を知ることができる。やはり、今回もこの考え方ののった周囲への聞き取りを行うことで、重要な事実を浮かび上がらせることができた。前述のAさんが「今まで地域に全く貢献してきておらず、無関心であった」ということだ。

2. 候補者への信頼

草の根の人たちへの信頼

「全ての人には大いなる可能性がある」、PHD協会や国際協力に関わる人間として、この言葉を信じずに活動は続けられない。加えて言えば、当会には地域で地に足をつけて生きる人たちへの尊敬がある。だからこそ「村の人」に拘ってきた。とても自分にはできない日々の生活をして、地域の中で助け合いながら生きている、そこに尊敬がある。そんな人たちの中から「選考」すること自体がおこがましいとさえ思う。とは言え、皆さんからの浄財や期待を預かって活動させていただいているので、その中でベストな方を選ぶ職責があるが、根底には尊敬の念がある。

3. 研修システムへの信頼

PHD協会の研修の一番の強みは「多くの人との出会い」であると思う。それも思いを持って行動を起こしながら歩んでいる人たちとの出会いである。指導者やホストファミリー、ボランティアの皆様、年間延べ5,000名前後になる。その生き方、姿勢、

考え方に触れ、研修生は成長する。PHD運動の提唱者である岩村先生は研修センターを持たなかった。当時の勢いであればセンターを持つことも可能だっただろう。他の研修NGOはすべからず自前のセンターを持っている。しかし、当会にはない。それは一見弱みに思えるが、強みでもあると感じている。なぜなら研修センターがない故に地域に出て、指導者のところに行き、ホームステイをして、多くの人に支えてもらわないと研修が成り立たない。それゆえにPHD協会は人との繋がりを大事にして、ここまでやってきた。人の繋がりがこそが当会の財産である。研修センターがあれば少ない人数で内部完結していたかも知れない。アシカさんもこの輪の中で人間的に大きく成長してくれると期待している。

40年近くの経験、過去の反省

過去の反省としては「正論、ロジックにこだわり過ぎて、人が見えていなかった」ということがある。

過去の選考で、私は「この地域の女性は結婚すると文化的な背景から高い確率で村を離れる。よって、男性の方が地域に

残り続ける可能性が高いので、男性を選ぶべきだ」と主張した。実際にその男性が選ばれたことがある。しかし、結果的にはその男性は帰国後地域を離れてしまった、ということがあった。他方、その地域から選んだ女性は、結婚後も長く地域に留まり活動している。上記の私の発言はロジック上間違いではなかったかもしれないが、結果から見れば誤りであったと判断せざるを得ない。時にはロジックを超えて人を見る必要がこの事例からわかる。

上記に加え、関係者間で議論を尽くしたプロセスもまた信頼に値するものだと感じている。アシカさんは現時点では未熟な面もあるかも知れないが、素質に溢れた女性だと思う。あとはその素質をどのように伸ばすか、これが私たちに課せられた責任である。前述のように事務局だけでは当会の研修は成立しない。引き続き皆さんのご支援をお願いしたい。



PT 2019年度研修生レポート

上写真/ゼンゼンさん近影。
下写真/オウ学校の低学年クラス。
同校はサンダーワラ住職が設立し、
ゼンゼンさんが卒業した学校。

特集 「お坊さんの夢は私が引き継ぐ」、恩返しと母への感謝を胸に

ゼンゼンさん、インタビュー

坂西 卓郎 = 聞き手 中村 朱里 = 編集

幼少期の苦勞

ゼンゼンさんは、ミャンマー北部サガインの農村で8人兄弟の7番目として生まれた。しかし生後間もなく、一家は仕事を求めて同国中部のマングレー郊外トートウィン村へと移り住んだ。親戚の家に身を寄せながら、父は山から切り出した竹を町で売り、母は小作人として働き、生計を立てていた。ゼンゼンさんは、この頃のことをよく覚えているという。「ご飯が大変でした。1日3回は食べられません。炊いたご飯に水を足して、量を増やして食べていました」。

一家の生活がさらに厳しくなったのは、ゼンゼンさんが5歳の頃である。「お父さんが病気で亡くなりました。高い熱が出ました。お金がないから病院には行きませんでした」。ある日、「お医者さんではないけど注射をする人」がやって来て、注射を受けた後に、不条理にも父親は亡くなってしまったという。大黒柱を失った一家はさらに困窮することとなった。

5歳というと、ミャンマーでは就学前教育が始まる年齢である。村には公立小学校があるが、授業料が高く、学用品の購入にもお金がかかる。兄弟のうち誰もトートウィン村に移ってからは、学校に行っていなかった。その頃、近隣のタダインシェ村に嫁いでいた姉から、新しい学校が設立されたことを母親が聞きつけた。学校に行けない子どもたちを受け入れているというのである。そこでゼンゼンさんもこの学校に入学することとなった。

二人は結婚するの??

この学校こそが、ゼンゼンさんが尊敬するサンダーワラ住職が運営する僧院学校である。ここで彼女は、「嬉しかった。勉強、好きですから」と勉強に励んだ。また、いつもサンダーワラ住職の傍にいて、洗濯や掃除などを率先して手伝った。そんな

ゼンゼンさんを住職は実の娘のように可愛がった。苦しい経済状況にも負けず、熱心に勉強に励む彼女の中に、住職は大きな可能性を見たのかもしれない。制服や靴、時には菓子や小遣いを与え、物心両面で彼女を支えた。彼女はそれらを母に手渡すことに喜びを感じていた。

しかし、二人の関係は村人たちの激しい嫉妬を買った。「村の人たちは、私たちのことを悪く言います。二人は結婚するのかって。それは絶対ないですよ!私、9歳、お坊さんは65歳ですから」。村人のみならず親戚までもが妬み、彼女の母親に学校を辞めさせるように迫った。しかし、母はゼンゼンさんを信じ、勉強を続けるように励ましたそうだ。

尼さんか、大学か

当時、僧院学校は4年生までしかなかった。4年生を修了し、進路を決める頃、村人の誹謗中傷に傷ついたゼンゼンさんは、「学校を辞めたい」と悩み、進学を諦めようと考えていた。また、公立学校では経済的な負担も大きくなるため、母親にも進学は無理だと言われていた。それを聞いた住職は、彼女に二つの選択肢を示した。「尼さんになるか、大学に行くか」。そして、住職は「今は教育もお金もないから皆があなたを見下します。でも、大学を卒業したら皆はあなたを見上げるようになります」と諭し、大学卒業まで支援することを申し出た。この言葉に後押しされ、ゼンゼンさんは進学を決意。彼女は5年生から10年生は公立学校に通い、大学では経済学を修めた。

ゼンゼンさんが経済学を専攻した理由は、銀行員になりたかったからである。「家は屋根がよくないからとっても大変。雨が降ると寝ることができなかった。だからお母さんにいい家を建ててあげたい」。そう願うゼンゼンさんにとって、銀行員の高給

は魅力的だった。しかし、そんな娘に対して、母は僧院学校で働き、住職に恩返しをするように叱咤した。当時、ゼン



サンダーワラ住職

ゼンさんは私立学校の教師の仕事にも誘われており、月給は約30,000円であった。僧院学校の初任給は約5,000円であったので、なんと6倍の額である。親孝行か住職への恩返しか。葛藤の末、ゼンゼンさんは僧院学校の教師となる道を選んだ。収入の不足は、夜に塾で勉強を教え補った。こうして来日までの4年間、教師としての経験を積んできたのである。

夢を引き継ぐ

悩みに悩んだ末の決断は、ゼンゼンさんにとってどうだったのだろうか。彼女は、僧院学校での仕事を選んで良かったと明言する。親孝行したいという気持ちはもちろんある。高い給料にも惹かれる。「でも、今の私があるのは、お坊さんのサポートがあったからです」。住職の利他の精神を敬い、「私もみんなのために頑張りたいです」と力強く話した。

住職の夢は、現在8年生までである僧院学校を大学まで拡充することである。政府も今までの取り組みを高く評価し、大学の設立を要請している。しかし、実現のためには課題も多い。最大の問題は、教師の給与が低いこと、住職が亡くなると求心力がなくなり、教師たちが離職してしまう可能性があるということだ。住職もこの問題を常々、心配しているという。これに対して、ゼンゼンさんは「お坊さんには言いません。でも私はいつも心の中で言っています。私はずっと働きます。死ぬまでこの学校で働きます。お坊さんが亡くなっても、この夢は私が頑張ります」と想いを語った。



左上写真/ゼンゼンさん(左)と研修受け入れを担当いただいた丹波篠山市保健福祉部健康課課長山下好子さん(右)。
 左下写真/丹南健康福祉センターでは、様々な業務を見学させていただいた。写真は乳児健康相談の準備中。ここで母親の骨密度検査も行っている。
 右/赤ちゃんの人形を抱くゼンゼンさん。この人形は、該当する月齢や年齢に合わせた体重、身長をもとに製作されている。

PT 2019年度研修生レポート

ゼンゼンさん 丹南健康福祉センターでの研修

国内研修生 横原 杏菜 山本 仁美 = 文

8月19日～23日の計5日間、ミャンマー研修生のゼンゼンさんは丹波篠山市にある丹南健康福祉センターにて研修を受けました。このセンターでは、乳幼児や妊婦の健康診断、料理教室、訪問介護、妊娠中の飲酒と喫煙のリスクや自殺予防など、健康にまつわる様々なことを学ばせていただきました。

研修が始まると、より深く理解しようと多くの質問をするゼンゼンさん。彼女が特に関心を持ったのは、自殺予防について。日本の自殺率の高さに驚きつつも、ミャンマーも若年層の自殺率が非常に高いと語ってくれました。自殺者を減らすためにはど

うすればいいのかを熱心に質問し、声かけで使ってはいけない言葉や対話の重要性について学びました。また、自身の経験や周囲で起こったことを話し、「助けたいです」と熱く語る眼差しに、彼女の強い意志を感じました。

最終日の研修のふりかえりにはプットリさん(インドネシア)、スシラさん(ネパール)も加わり、熱心に学びを深めていました。特に一番白熱したのは「日本の避妊方法」についてです。自国では知らなかったことがたくさんあったようで、質問と納得の連続でした。このふりかえりは保健衛生について理解を今後深めていく上で、ゼンゼン

さんをはじめ研修生たちにとって、大変意義あるものになりました。

多種多様なことを学び、そこからまた強い信念が生まれる。大事なことは相手を思いやる心であると、研修後、沢山語ってくれました。ゼンゼンさんにとって今回の研修は「人に寄り添いたい」という心をさらに大きく成長させた5日間だったのではないのでしょうか。先生である彼女は、教育分野だけでなく、精神的にも生徒に寄り添う、そんな先生に成長してくれると思います。



丹南健康福祉センターの正門前にて(左から山本、ゼンゼンさん、横原)

PT 2019年度研修生レポート

山本 健太郎 = 文・編集



ゼンゼン (ゼンモーエー)

ミャンマー / 25歳

日本のがっこうは たいりくが
 あります。ミャンマーは たいりくが
 ないです。おしえるじかんも ない
 です。こゝも たち は ひるごはんの
 あして エジかん ぐらい せんか
 じぶんで あそびます。日本のがっこうは
 すごう、すいらい、おんがく、ぎんごう、
 かていがた おしえます。ミャンマーの
 がっこうには ないです。日本のがっこう
 は がくせいたちに つなみから
 みを まもるために すいらいを おしえ
 ます

(かがしなために おかあさんが じんじんと
 こゝもを ケアしたこと、からだをたいせつ
 にすることをおしえます。みんなのいのちが
 たいせつなことです。こゝもたちがあがるた
 めにおしえます。そのことを あがたから
 こゝもたちが けがを すくはないに なります
 4ねんせいから およこのひと おんがくのひと
 のがたの こゝもを おしえます。からだの
 こゝもを べんきょうしましたから、からだを
 とぎひんりしせんたいじょうごで す

日本のがっこうは たいせんのこゝもを べんきょう
 できるでいいです。おんがくせいたちに、えいご
 かていがすごう、すいらい、おんがく、ぎんごう、
 たいりくを おしえたいです。日本では いんじけい
 けんじょうしています。おんがくを べんきょう
 (たいけんせんせいを じんじんと けがしな
 かんがります)

ゼンモーエー

「みんなと気持ちを伝え合い、楽しみながら
 学ぶことを勉強しました」

ゼンゼンさんが教えているミャンマーの学校とは違い、研修で訪れた保育園や小学校では、子どもたちが様々な授業やアクティビティを通じて、楽しみながら学んでいることを知りました。特に日本の道徳や保健体育の授業を通して学ぶ「命の尊さや体の健康」については、自身の学校でも実践したいと意欲的です。

また彼女が来日後と大きく変わったのは「心」の部分です。真面目で責任感が強いがゆえに、悩みや不安を抱え込み、自分一人で苦しむこともあったゼンゼンさん。これまでの研修を通じて、人に頼ることは恥ずかしいことではなく、気持ちを共有してみることで他者と繋がる大切さを知りました。

村に戻ったあとは、生徒たちと気持ちを伝え合い、一人一人が勉強を楽しんでいるような教え方を実践し、他の先生たちにも共有したいと意気込んでいます。

PT 2019年度研修生レポート



プットリ ダリア

インドネシア / 22 歳

「みんなの中心センターでみんなの中心こう、
 いち、きもち、たいせつにやるとのためにみんな
 があつまって、なつみをはなして、
 そうたんとします。みんなの中心こうとくなく
 とわがやのためにルランスとがえいたうの
 たべものとかびょうきのこととそうたんとします。
 じいさんおじいさんとおやつのいかにきめまあ。
 はらんのえいほうがたがルランスのとれた
 たべものをたべることになれる。おまえ
 とこいさんをたべたあはちゃんとはあがき
 ちします。びょうきがあるかないか、いつ
 かたをけんしんします。たいしゅう、しんちゅう、
 けつあつをはかして、うんじょうして、けんこう
 てきないせいかつをしょうがんとつけます。」

「うさぎをべんきょうしました。せいのことと
 かたがみのこととべんきょうしました。うさぎを
 つくすためにうさぎをばかして、かたがみを
 つくす、うさぎをばかして、うさぎの
 こまわりとこととわがきいところをきくとき
 がまんこととてきまき。せいのくにしてとを
 しなけれはなりません。うさぎのけんしん
 してスコット、ワンス、スポン、ドリスを
 つくりました。わがきはうさぎをばかして
 せいごまててきるほうに。わがきはなつた
 こととわがひとちとわがちあいたいです。
 なつたこととわがててかくにたてたいです。
 うさぎのせいごまをつくすあげたいです。
 うさぎをしなからこととをちせわきることとが
 てきまき。 アフリカリア

「村の女性たちに洋裁を教えて、
働く場所を作ってあげたい」

プットリさんが暮らすタラジャラン村の主な仕事は農業です。彼女も幼い頃から米や野菜を栽培し、一日中働いて家族の生活を助けていました。自身の経験から、村の女性が子育てや家事をしながらでも作業することができる仕事はないかと悩んだ末、洋裁を考え始めました。高校卒業後、地方都市のプキティンギで洋裁工場の縫製工程を2年間担当し、経験を積みました。

日本での洋裁研修では、素晴らしい指導者の方々との出会いを始め、これまで経験したことがなかった採寸や型紙作り、裁断を学び、自分で一から洋服を仕上げるができるようになりました。

また保育や保健衛生の研修では、食事面のバランスや健康な体づくりを勉強し、村の子どもたちの病気や歯の問題、また高齢者のケアについてより深く考えるようになりました。

日本での学びを生かした村の地域発展の実現に向けて、今後も彼女らしく積極的に研修に励んでいきます。

PT 2019年度研修生レポート



スシラ・バセル・サルキ

ネパール / 23 歳

「日本ではほいくせん、ようちえん
 きんぐよくか"あります。ほいくせん
 ではえいごのことをかんがえて
 じいさんをつくらます。日本のほいくせん
 ではあぶさ、しお、こめ、やさいを
 はかしてえいごのじいさんをつくらます。
 ほいくせんのはたけではうま
 のあぶさのやさいつくるのと
 やさいのやさいのやさいとせ
 せんせいとせいにしてやさいを
 つくらます。えいごのじいさんつくる
 のときはたけか"とつてつくらます。
 せんせいたちはじいさんのせいの
 ようにおせわしてします。日本
 ではほいくせんか"あるか"お父さん

とお母さんはじいさんか"をつくらます。
 じいさんのために、せいのべんきょうの
 ために、せいのせいごまのために
 じいさんか"をつくるのはとてもいい
 こととす。日本のほいくせんでは
 はパマママラスか"あぶさ"はじい
 のパマママておせいのうにん
 しんをたいけんします。うのと
 おせいかにおせいをつけます。せいの
 おせいのうにはにんじんのやさい
 あかひますか"たせいおよめさんの
 じいさんか"をつくらます。あぶさに
 ほいくせんか"たいです。あぶさに
 じいさんか"をつくらます。あぶさに
 せいのえいごのあぶさをつくらます。

スシラ バセル サルキ

「体に良い食べ物を村の子どもたち
に作ってあげたい」

スシラさんが住むジトゥルボカリ村では、有機農業をしている人は少なく、化学肥料を使う場合が多いそうです。農業研修では、土着微生物を使った肥料やコンポストなど、工夫して有機農業をされている指導者の方々の思いと技術に触れました。有機と無機で味や品質が全く違うことにも驚き、村に帰ってからの有機栽培の実践を考えています。

また、スシラさんの村では子どもたちは大人と同じように味が濃く、油っこい料理を食べています。そこで、日本の保育園では無農薬野菜を使った幼児食を作ることを学び、保健センターでは子どもたちに栄養価の高い食事を作る経験をしました。

スシラさんのモットーは「諦めない気持ちと根性」、常に自分の考えや気持ちにまっすぐです。

今後は人権や組合研修を通じて、自らの学びを上手く村の人たちに伝え、協働していくために必要な姿勢や配慮を学んでいきます。

2019年度研修生 4月～10月研修

■ ゼンゼンさん

神戸YMCA学院専門学校 (神戸市/日本語)
 滞在: 葛原時寛さん、香織さん
 はらっぱ保育所 (西宮市/保育)
 滞在: 前田公美さん
 阿弥陀小学校 (高砂市/初等教育)
 滞在: 神吉泰彦さん、道子さん
 神戸生田中学校 (神戸市/放課後特別学級)
 神戸YWCA保育園 (神戸市/保育)
 ステップハウス (高砂市/ハンディキャップガイド)
 滞在: 神吉泰彦さん、道子さん
 丹南健康福祉センター (丹波篠山市/保健衛生)
 滞在: 円谷利行さん、豊子さん

■ プットリさん

神戸YMCA学院専門学校 (神戸市/日本語)
 滞在: 宝田和正さん、てるみさん
 友愛幼児園 (神戸市/保育)
 高木育代さん (神戸市/洋裁)
 たいようこども園 (養父市/保育)
 滞在: 室見千尋さん
 前田弘子さん (高砂市/洋裁)
 滞在: 神吉泰彦さん、道子さん
 赤坂真砂さん (神戸市/洋裁)
 畑中トキ子さん (尼崎市/洋裁)
 前田弘子さん (高砂市/洋裁)
 滞在: 神吉泰彦さん、道子さん

■ スシラさん

神戸YMCA学院専門学校 (神戸市/日本語)
 滞在: 黒野美代子さん
 のぞみ保育園 (神戸市/保育)
 渋谷富喜男さん (神戸市/有機農業、野菜)
 神戸YWCA保育園 (神戸市/保育)
 寺田まさみさん
 (豊岡市/稲作、野菜、炭素循環農法)
 はらっぱ保育所 (西宮市/保育)
 滞在: 前田公美さん
 伝田農園 (丹波篠山市/ブルーベリー栽培)
 のり・たま農園 坂口典和さん、玉山ともよさん
 (丹波篠山市/有機農業、野菜)
 滞在: 円谷利行さん、豊子さん

杉の子保育園 (神戸市/保育)
 阿弥陀小学校 (高砂市/初等教育)
 滞在: 神吉泰彦さん、道子さん
 嵯山女学園大学附属小学校・中学校
 (名古屋市/初等・中等教育)
 名古屋石田学園星城中学校
 (名古屋市/中等教育)
 デイサービスしょうぶ苑
 (名古屋市/高齢者介護)
 滞在: 渡辺観永さん
 愛徳学園中等学校 (神戸市/中等教育)
 滞在: 黒野美代子さん

西浦小学校 (羽曳野市/初等教育)
 滞在: 五十嵐美果さん
 ステップハウス (高砂市/ハンディキャップガイド)
 滞在: 神吉泰彦さん、道子さん
 シオンの園
 (隠岐郡西ノ島町/
 保育、高齢者介護、障がい者福祉)
 滞在: 佐倉真喜子さん
 松江市健康部・子育て部 (松江市/保健衛生)
 滞在: 山本志歩美さん、浜村愛子さん、
 岸井麻美子さん

泉精一さん
 (松山市中島町/果樹栽培、土着微生物)
 滞在: 岡田義之さん、亜紀子さん
 西浦小学校 (羽曳野市/初等教育)
 滞在: 五十嵐美果さん
 ひょうご部落解放・人権研究所、
 (姫路市/人権、フィールドワーク)
 ステップハウス (高砂市/ハンディキャップガイド)
 滞在: 神吉泰彦さん、道子さん
 加東市保健センター (加東市/保健衛生)
 滞在: 竹中弘子さん

PT 2019年度研修生レポート



高砂市のステップハウスで、利用者さんの送迎を手伝うゼンゼンさん。



プットリさん(左)と前田弘子さん(右) 前田さんが指導されている高砂市の洋裁教室にて。



スシラさん(右)と泉精一さん(左) 松山市中島町にて農業研修。土着菌の働きや柑橘類の栽培について学ぶ。



PT 2019年度研修生レポート

日々是 東奔西走

研修担当 山本健太郎

『自信と勇気の旅路』

～プットリさんが人との 出会いから学んだこと～』

今年4月に来日し、日本語研修、専門研修と一生懸命取り組んできた研修生3人。喜怒哀楽に溢れた日々をみんなで乗り越え、ここまで来ました。その中でも今回はインドネシア出身のプットリさんに着目したいと思います。

【人となり】

幼くして父親を病気で亡くした彼女は、母親と家族を支えるために小さい頃から家事や畑仕事を手伝いました。学校と仕事の両立や日々の貧しさが辛く、涙することも多かったそうです。しかし、その苦勞を乗り越えたことで、我慢することや自分を育ててくれた親への感謝が身に染みて分かったと言います。

【かけがえのない出会いから】

日本では洋裁と保健衛生を中心に、様々な研修先を訪れる機会がありました。もちろん専門的な技能を学ぶことは大切でしたが、

新しい場所での素敵な出会いや繋がりが彼女をより強く大きくしました。洋裁研修では、情熱や思いやりを持って服作りに向き合う指導者の方々に会いました。隠岐・松江を訪れた際は、受け入れて下さった人たちの家族のような温もりに触れました。

彼女はよく言います。「日本に来て、たくさんの人たちに会いました。国や考え方が違っても、みんな同じ。質問やお話をして、思いを分かちあえることが嬉しかったです」と。

他人の気持ちに寄りそえる優しさを人一倍持っているプットリさん。残りの研修も合言葉の“自信”と“勇気”を持って、彼女らしく歩んでいきます。



隠岐の島研修にて 佐倉真喜子さん(右)と美角真美子(左)さんとプットリさん(中央)

左上/西浦小学校で谷垣深雪さんの保健の話聞く3人(教育研修)。
 右上/杉の子保育園で子どもと遊ぶゼンゼンさん。
 左下/はらっぱ保育所で、子どもたちへの給食を準備するスシラさん。
 右下/松江市保健福祉総合センターにて救急法を学ぶプットリさん。

ミャンマー内戦被害者の
子どもたちへの支援

チャリティ"MOEMOE"Tシャツ

「子どもたちにアイスクリームを食べさせたい」



2018年度ミャンマー研修生のモーモーさんは、同国マンダレー近郊シュエグニ孤児院で内戦被害者の子どもたちのお世話をしています。彼女の活動支援のため、CHARI-Tさんが"MOEMOE"Tシャツを作ってくれました。

CHARI-T



Tシャツのご購入は左のQRコードか下のURLから、CHARI-Tのウェブサイトへアクセスしてください。
<https://charit.official.ec>



"MOEMOE" Tシャツを着るモーモーさん

"MOEMOE" Tシャツ5,000円1点につき、1,250円が孤児院でのモーモーさんの活動に寄付されます。

八木 純二 = 文

モーモーさんはミャンマー中部マンダレー近郊のシュエグニ孤児院にて内戦で肉親を失った子どもたちや、疎開してきた子どもたちのお世話をしています。

彼女のがんばりにもかかわらず、孤児院の運営は厳しい状況です。そのため、子どもたちにはアイスクリームなどのお菓子を食べる機会がなかなかありません。モーモーさんは厳しい生活を送る子どもたちに少し

でも良いので、お菓子を食べさせてあげたいと思っています。"MOEMOE" Tシャツは彼女のそんな思いを受けて作られました。売上の一部が子どもたちの生活向上に活用されます。このTシャツの購入を通じて、シュエグニ孤児院の子どもたちを応援していただくと幸いです。



Tシャツの柄は、"MOEMOE" (上写真) の他、ワンポイントで"アイスクリーム"と"歯ブラシ"があります。サイズはS、M、L、XLをご用意しています。詳細はPHD協会までお問い合わせください。

PHD 活動紹介 2019年7月～2019年10月

- | | |
|--|---|
| <p>7月</p> <ul style="list-style-type: none"> 1日 神戸学院大学 社会防災特別講義Ⅳ (坂西) 3日 小林幸子税理士往査 (坂西、古寺) 5日 高砂ロータリークラブ例会 (坂西) 6日 インドネシアスタディツアー事前説明会 (坂西、山本) 7日 モーママ日本語検定試験 ロータリー米山記念奨学セミナー (坂西、濱) 8日 モーママ帰国 (坂西、山本、芳田) 9日 NGO相談員会議 ～10日 (坂西) 育英西中学校生徒来訪 課外授業 (八木) 畑中トキ子さん来訪 (山本) 10日 篠山ロータリークラブ例会 (演) 11日 川西ロータリークラブ例会 (演) 定例スタッフ会議 (坂西、八木、山本) 12日 加古川中央ロータリークラブ例会 (演) 13日 タイスタディツアー・中学・高校生リーダー研修説明会・オリエンテーション (坂西、八木) 加東市連合婦人会 交流会 (坂西、山本) 17日 インドネシアスタディツアー ～24日 (坂西、濱、山本) 国際理解教育・開発セミナー・打ち合わせ (中村) 19日 「農業分野の外国人材の受け入れ×ODA」を考えるフォーラム (中村) 21日 タイスタディツアー・中学・高校生リーダー研修オリエンテーション (八木) 26日 御所の杜学童クラブ講演 (山本) 27日 研修生中間ふりかえり (坂西、山本、芳田) 30日 ESD拡大運営委員会 (八木) 31日 タイスタディツアー・中学・高校生リーダー研修 ～8月5日 (坂西) <p>8月</p> <ul style="list-style-type: none"> 1日 加古川ロータリークラブ例会 (演) Gochiso Beviis氏来訪 (八木) 5日 第16回多文化共生のための国際理解教育・開発セミナー ～6日 (坂西、中村) 7日 篠山ロータリークラブ例会 (演) 外務省NGOインターン制度ヒアリング (坂西、山本) 8日 神戸モーニングロータリークラブ卓話 (坂西) 9日 川西ロータリークラブ例会 (中村) 万博基金助成金募集説明会 (中村) 17日 ミャンマースタディツアー事前説明会 (坂西、八木) 定例スタッフ会議 (坂西、八木、山本) 21日 ミャンマースタディツアー ～29日/坂西延長31日 (坂西、八木) 23日 兵庫人権研究所 研修ミーティング (山本) 25日 大阪YWCA講演 (山本) <p>9月</p> <ul style="list-style-type: none"> 2日 ミャンマー尼僧ティリサンダーさんと懇談 ミャンマー関西 猫原信男運営協力委員出席 (山本) 4日 小林幸子税理士往査 (坂西、古寺) NGO相談員JICA国際協力推進委員との会合 (坂西、中村) 5日 コープともしびボランティア振興財団 訪問 (坂西、八木、中村) 6日 川西ロータリークラブ例会 (演) 7日 ロータリーカウンセラー奨学生合同ミーティング (演) 10日 ネパールスタディツアー ～18日 (坂西、山本) レインボースクール コープ福田店 (芳田) 篠山ロータリークラブ例会 (演) 12日 加古川ロータリークラブ例会 (演) 17日 ESD拡大運営委員会 (八木) 22日 第4回ESD実践研究集会 ～23日 (八木) 23日 インドネシア出張 ～25日 (坂西) 26日 神戸YMCA国際委員会 (坂西) 28日 グローバルフェスタJAPAN2019: NGO相談員 ～29日 (八木) 日本の国際協力NGO×外務省: NGO相談員 (酒井、坂西) 30日 定例スタッフ会議 (坂西、八木、山本) 神戸NGO協議会 (坂西) | <p>10月</p> <ul style="list-style-type: none"> 1日 職員面談 (坂西、濱) 3日 職員研修 メタファシリテーション・講師中田豊一氏 ムラのミライ (酒井、坂西、中村、濱、八木、山本) 4日 関西学院高等部打ち合わせ (坂西) 川西ロータリークラブ例会 (演) 高砂ロータリー卓話 (坂西) 関西学院高等学部 WWL講演 (坂西) 5日 ひょうごん ゆるゆるとNPOの先輩の話を聞く会 (坂西) 7日 ICAN理事会 (坂西) 9日 神戸市役所つなぐ課 秋田市会合 (坂西) 13日 HYOGON運営委員会 (坂西) 14日 神戸市シルバーカレッジ学園祭 (芳田) 16日 タイ王国・ダムロンラドソソク高校来日、歓迎・交流・講演会 (坂西) 17日 職員研修 文章の書き方講座・講師太田貞夫理事 神戸新聞 (古寺、坂西、中村、濱、八木、山本、芳田) 18日 高砂市国際交流協会 講演 (坂西) 加古川中央ロータリークラブ例会 (演) 東日本研修旅行オリエンテーション (坂西、山本) 21日 神戸ソーシャルキャンパス チラシ共同郵送発送作業 (中村) 関西学院大学 講演: NGO相談員 (坂西) 福知山淑徳高校 講演 (山本) 23日 神戸親和女子大学 協議 (坂西) 26日 コープこうべ (中川寿子監事) 訪問 (坂西、八木) 篠山ロータリークラブ例会 (演) 29日 神戸YMCA秋祭りブース出展: NGO相談員 (古寺) ソディ例会 (芳田) 全日本自動車産業労働組合総連合会 寄贈式 (坂西、山本) |
|--|---|



7月9日育英西中学校の生徒さんたちが課外授業。(PHD協会事務所)



7月31日～8月5日タイスタディツアー・中学・高校生リーダー研修。写真は水施設支援事業を行う、アカ族の村を訪問した際の様子。



自動車総連 高倉会長と記念撮影。福祉カンパ特別寄贈式の模様。

PHD News

◆ 連合、自動車総連の皆様に感謝!

今年も日本労働組合総連合会様から「連合・愛のカンパ」と全日本自動車産業労働組合総連合会様から「福祉カンパ特別寄贈」をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。10月末には連合様、自動車総連様の本部事務所に研修生と訪問、研修報告をさせていただきました。



連合 山根木総合局長(写真右)と記念撮影

◆ 広報・啓発担当職員1名募集

2020年4月より広報・啓発担当として、勤務していただける職員を募集します。PHD協会の広報・啓発全般を取り仕切る職種であり、大きな責任は伴いますが、やりがいのある業務を担当していただけます。

2019年12月13日と14日に募集説明会を実施する予定です。関心のある方、ぜひご参加ください。

広報・啓発担当
募集要項は
こちら



■ 研修先に関するお詫びと訂正

事業報告2018(P.3)における、サビナさん(ネパール)の研修先に掲載漏れがございました。神戸YWCA保育園様の皆様、ならびにご関係者の皆様に対して、お詫び申し上げます。以下の通り、追加訂正させていただきます。

7月 保育/神戸YWCA保育園/神戸市中央区

◆ 2020年度国内研修生1名募集

2020年度の国内研修生を1名募集いたします。海外からの研修生とともに学び、アジア・南太平洋の草の根の人々と共に生きるための活動に関わりませんか。PHD協会主催のアジア・スタディツアーや国内研修旅行への同行、インドネシア・日本語講師ボランティア派遣などが経験できま。募集詳細はHP(右のQRコードよりアクセス)をご覧ください。



国内研修生
募集要項は
こちら

2020年度研修生のホストファミリー募集!

期間: 2020年4月中旬～2021年3月中旬の約1年間。来日後の日本語研修中(6週間)は毎日、現場研修開始以降は、月平均1週間～10日程度。12月～3月は、研修内容により月20日程度となります。

経費: 当会規定の食費、滞在費をお支払いいたします。その他、交通費、医療費などは基本的に当会が負担します。

応募条件: 当会事務所から公共交通機関で1時間以内で通える範囲のご家庭。
*詳しくは、お問い合わせください。



アシカさん
女性 22歳
ネパール



ブディマンさん
男性 24歳
インドネシア



トートウェイさん
女性 36歳
ミャンマー

気が付いたら年の瀬 今年一年を振り返って 〇月〇日のPHD協会

山本 昨年は毎日変わらず無色な日々、今年のテーマは「昇」。PHDに飛び込み研修生と波瀾万丈な日々。景色もカラフルに色付き、生きていることを実感。

坂西 PHD入職10年目。相変わらず挑戦と失敗を繰り返す日々。次の挑戦は40周年記念事業。初体験で不安いっぱい。皆様のご支援を切に願う!

八木 神戸に住んで4年、最初は坂ばかりで馴染めない町とを感じるも、今は急こう配の坂がない町に行くとソワソワ落ち着かず、帰りたくなる今日この頃。

中村 子持ち・ブランク有りのアラフォーが就職できるのか?不安だった今年の初め。強がりな私が「助けてもらうこと」を学び、感謝と共に年の瀬を迎える。

上から 11m、42.7m、84.5m、200.9mの順。

2019年度研修生 帰国報告会のご案内

下記のとおり2019年度研修生たちの帰国報告会を行う予定です。1年の学びや、村に戻ってからの活動計画などを発表させていただきます。お誘いあわせの上、ご参加ください。

日時: 2020年2月29日(土)

13:30～16:30

場所: 兵庫県私学会館 206号室

神戸市中央区北長狭通4丁目3-13

資料代: 500円

お問い合わせはPHD協会まで

TEL: 078-414-7750



2021年PHD協会は創立40周年